

# 衛公研情報誌の記事からみたこの20年間



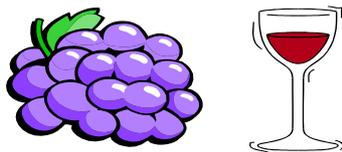
創刊以来今日までの衛公研情報誌「YIPH 情報」「衛公研だより」が取り上げてきた記事をふり返ることにより、大まかにこの20年間のたどってみました。

## 1. 1984～1988年

「地方病として知られている日本住血吸虫病は、撲滅対策の努力がみのり終息のめどがたつようになりまして」という書き出しで始まる「**地方病この名を過去のものにするために**」(YIPH 情報 Vol. 1, No.2, 1984)と題する記事の中では、地方病の歴史と私どもの研究所が設立当初から行ってきた疫学調査について紹介しています。先人達の100年余にわたる撲滅への努力がみのり、後年の1996年によく流行終息を迎えることができました。

古くからの感染症が終息を向かう一方で、はじめてのエイズ患者が1981年にアメリカで発見されました。日本でも1985年にエイズ患者がはじめて確認されました(「**AIDS**」YIPH 情報 Vol. 2, No. 1, 1985)。

1985年のYIPH 情報 Vol. 2, No.2をひも解くと、真っ先に目に飛び込むのがワイン騒動です。これは輸入ワインにジエチレングリコールが混入されていたという事件で、「**ワイン事件と科学**」「**ワイン騒動に想う**」という記事の中で、検査待ちの試料が山と積まれた試験室の中で、担当者は日々分析作業に追われた様子が紹介されています。



1980年代になると国民の生活に根ざした環境問題に関心が高まってきました。スパイクタイヤによる粉塵の発生が問題となり(YIPH 情報 Vol. 2, No.1, 1985) また、建築材料として多用されていた石綿の健康影響が大きな問

題となりました(「**新たな環境汚染物質-石綿-**」YIPH 情報 Vol. 5, No.1, 1988)。

## 2. 1989～1993年

1990年に県内のダム湖水を水源とする水道水のカビ臭が大きな問題となりました。調査の結果、藍藻類等の植物プランクトンの大量発生が原因とわかりました。(「**水道水のかび臭について**」YIPH 情報 Vol. 8, No.2, 1991)。

また、「飲料水」についてこの頃問題になったことに地下水の「ハイテク汚染」があります(「**トリクロロエチレンとその仲間たち**」YIPH 情報 Vol. 7, No.1, 1990) 汚染物質は、電子関連産業で広く利用されているトリクロロエチレンなどの有機塩素系化合物です。1993年の水道水質基準改正では、これらハイテク汚染物質を含め規制される物質が大幅に増えました(「**おいしく安全な水道水をめざして**」YIPH 情報 Vol. 10, No.1, 1993)。

一方、暖房やアルミサッシの普及などで住環境が快適になった反面、屋内でヒトに害を与えるダニ類の発生が多発し、その対策について紹介しました(「**生活環境と害虫-ダニ類による被害**」YIPH 情報 Vol. 10, No1, 1993)。

## 3. 1994～1998年

1995年は阪神大震災やオウム真理教による地下鉄サリン事件など大きな事件が相次ぎました。特にサリン事件で使用されたサリンの製造プラントが、県内に存在していたことは、非常に大きな衝撃でした(「**サリンと四塩化炭素**」衛公研だより Vol. 12, No.2, 1995)。

1996 年は感染症が問題になった年です。5 月末から大阪府堺市を中心として腸管出血性大腸菌 O157 による食中毒・感染症が発生しました。不幸にも死者がでたことや規模の大きさから社会問題になりました(「**日本を恐怖に陥れた O-157**」**「出血性大腸菌 O-157: H7**」**衛公研だより第 27 号,第 29 号, 1996**)。

6 月には埼玉県で病原性原虫の「クリプトスポリジウム」による集団下痢症が発生し、飲料水に対する安全性が問われました(「**クリプトスポリジウムの水道水への混入**」**衛公研だより第 29 号, 1996**)。これを契機に県内の原水、浄水について、この原虫の定期的な監視検査が行われるようになりました。

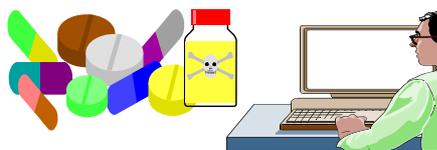
90 年代の後半になると、ダイオキシンや環境ホルモンが新たな環境問題として表面化してきました。ダイオキシンについては**衛公研だより第 33 号**(「**ダイオキシン-何がわかってきたか?**」, 1997)に掲載し、環境ホルモンについては「**環境ホルモン<内分泌かく乱物質>**」と題して、**衛公研だより第 36, 38, 39 号**(1998)にシリーズで紹介しました。

#### 4. 1999～現在

そして時代は 21 世紀となりましたが、環境問題をみますと、環境ホルモンや地球温暖化(**衛公研だより第 56 号, 2002; 第 59 号, 2003**)、廃棄物の問題(**衛公研だより第 61 号, 2003**)など、数々の問題が 20 世紀から未解決のまま引き継がれてしまいました。しかし、「**環境ホルモン実態調査**」(**衛公研だより第 41 号, 1999**)を開始するなど、これらの問題を解決するために努力しているところです。

一方、感染症では、昨年は新興感染症 SARS の出現、今年には鳥インフルエンザの流行など次々に出現してくる感染症の対策に追われています。ヒトのインフルエンザは毎年、流行を繰り返しているため、本誌で何回も最新情報を

掲載しました(最新のものは**衛公研だより第 54 号, 2002**)。今一番危惧されているのは、ヒトと鳥のインフルエンザウイルスが混ざり合ってヒトに対して感染力の強い新型インフルエンザウイルスが誕生することです。また、これらの大流行する感染症も重要ですが、日本でエイズ患者・感染者が増加傾向にあることも忘れてはいけません(「**エイズを忘れてはいませんか**」**衛公研だより第 59 号, 2003**)。



次に医薬品や食品についてみると、国内では販売が禁止されている薬物や医薬品が混入されている食品がインターネットや個人輸入により容易に手に入る時代になり、様々な健康被害を起こしています。ダイエット食品による健康被害がその 1 例です。(「**やせ薬の内服は慎重に**」**衛公研だより第 56 号, 2002**)。

また、輸入牛肉の BSE 問題、残留農薬、偽装表示、無登録農薬の使用などで、改めて「**食の安全性**」が社会問題となっています。こうした事件の反省から、チェック体制を強化するため、食品基本法の制定、食品衛生法の一部改正が行われました(「**食の安全を求めて**」**衛公研だより第 61 号, 2003**)。

以上、衛公研情報誌の発刊から今日までを振り返ってみました。これから先の 20 年も私たちの生活や環境がさらに大きく変わることが予測されます。衛生公害研究所では、県民の皆様の健康と安全な生活や環境を守るため、試験検査・調査研究業務の充実を積極的に図るとともに、科学的データや最新情報をこれからも皆様に提供して行きたいと思っています。

(情報委員会)